

2016年7月淑徳講義

「現象学、存在論、欲望論Ⅲ」
——哲学の現在の地平

欲望論連続講義

竹田青嗣

20170730

序 現代哲学連続講義について

(1) 2014年から、現代哲学連続講義

- ①2014年8月 「現代思想の三大対立点」(NHK文化センター青山)
- ②2014年11月 「現象学・存在論・欲望論Ⅰ」(淑徳大学公開講座) 意味と価値
- ③2015年6月 「現象学・存在論・欲望論Ⅱ」(淑徳大学講義) 生活世界の一般構成
- ④2015年8月 「現代哲学の最前線Ⅰ」(NHK文化センター青山)
- ⑤2015年10月 「哲学はどこへゆくかⅠ」(朝日カルチャー東京)
- ⑥2015年12月19日(土) 「現象学・存在論・欲望論Ⅲ」(淑徳大学講義)
- ⑦2016年2月27日(土) 「現代哲学の最前線Ⅱ」(NHK文化センター青山)
- ⑧2016年6月4日(土) 「哲学はどこへゆくかⅡ」(朝日カルチャー東京)
- ⑨2016年7月30日(土) 「現象学・存在論・欲望論Ⅳ」(淑徳大学講義)
- ⑩2016年10月(土) 「『欲望論』総括」(NHK文化センター青山)
⇒講義内容 重複あり

(2) 現代哲学を中心に これまでの概要 (サブ講師 岩内章太郎)

→哲学の根本問題(ギリシャ哲学・近代哲学・現代哲学)

現象学 存在論 分析哲学(言語哲学) ポストモダン思想 欲望論

(3) 「欲望論」(現在執筆中) 本体論の解体 欲望相関性 欲望論的身体論

これまでのまとめ

(1) 哲学の謎

「存在の謎」 「認識の謎」 「言語の謎」
「ゴルギアスの問い」

(2) 前回講義の概要

① 認識問題 本体論の解体

② 欲望相関性

③ 「身体」の本質観取

1. 感受 2. 存在可能 3. 〈能う〉

★欲望論の主要コンテンツ

- (1) 現前意識の現象学
- (2) 世界の一般構成
- (3) 認識対象の本質学
- (4) 時間意識の構成
- (5) 欲望原理(欲望相関性)
- (6) 意味と価値の原理
- (7) 「身体」の本質
- (8) 幻想的身体
- (9) 価値審級の生成

Review

- ① 認識問題 本体論の解体
- ② 欲望相関性
- ③ 身体の本質

(1) 認識問題 本体論の解体

認識論(主観-客観一致問題)

認識論 リンゴ図式



2) 近代哲学の中心問題 →「認識の謎」

- ① 認識は可能か → 認識問題 (主観-客観問題)
- ② 自由は可能か → 社会哲学
- ③ 生(人間)の意味は何か? → キリスト教の没落

★ デカルトの呈示 主観-客観は一致しない? ⇒ 難問

- ① 客観認識 正しい認識 真理は一切存在しない
⇒ 自然科学の客観認識は? 数学は?
- ② 相対主義(不可知論) どんな認識も立場、観点による
絶対的な観点はない
⇒ その帰結は?

**善悪、正しさ・不正の基準は存在せず
⇒ 一切は力の論理に帰結する!**

① 本体論の解体

② 認識問題の解明

ニーチェとフッサール

ニーチェ：カオスー力構図

客観世界という観念の解体

欲望ー身体

「真理」の観念の解体

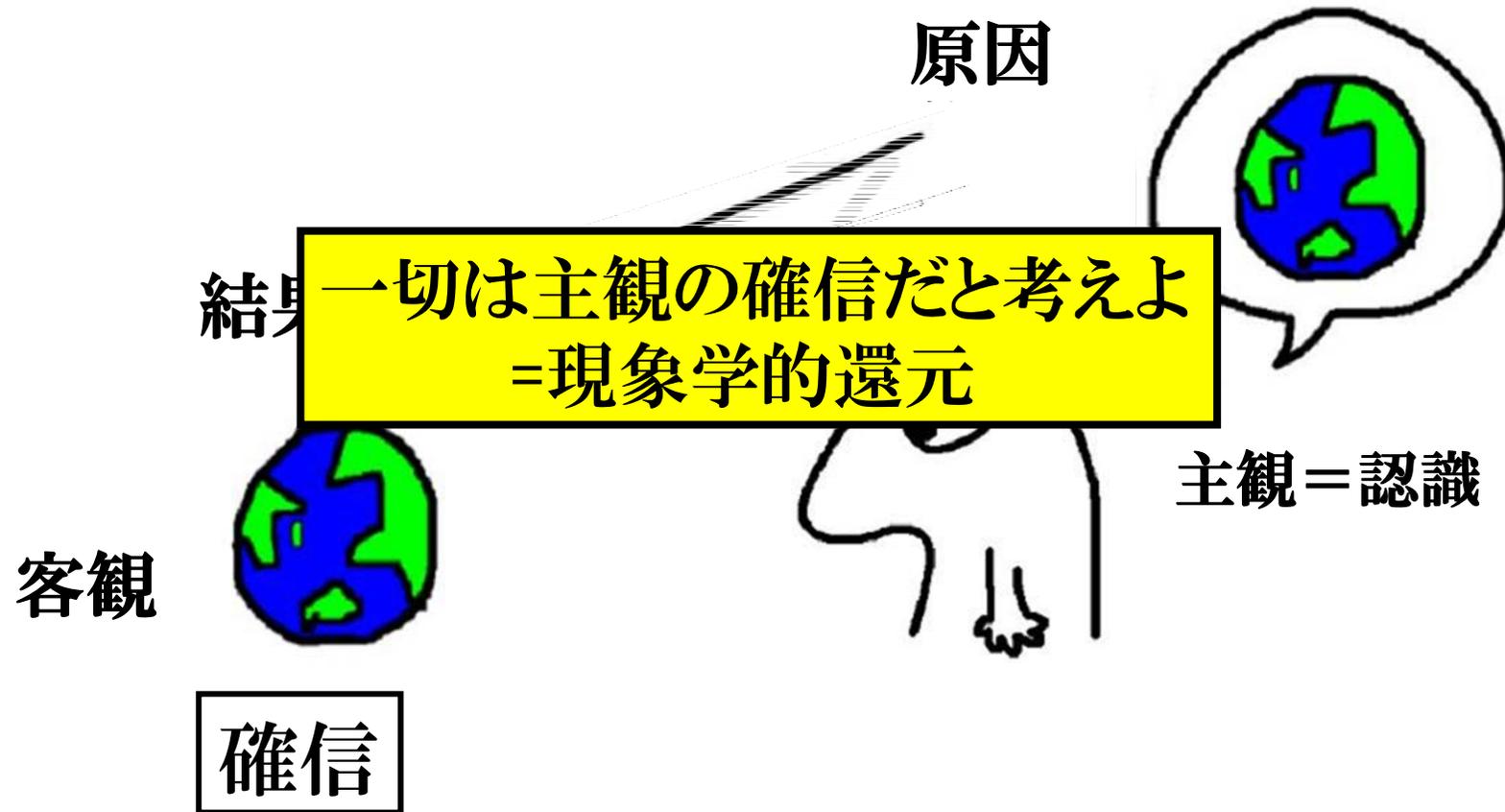
カオス

物自体

「本体」の観念の解体

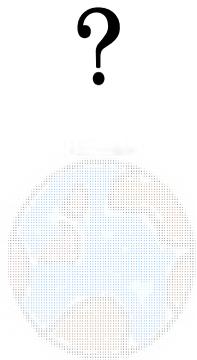
フッサール現象学 一切の認識の信憑への還元 *

還元の遂行 ⇒



信念対立と共通了解

確信成立の構造
を吟味すると



C: 共通了解の領域

自然科学
数学
基礎的論理学など

X: 共通了解不成立の領域:

感受性・審美性
価値観
宗教
人間観
世界観など

☆ 認識問題の解明

⇒ 何が解明されるべきか？

(1) あらゆる認識は相対的→ 自然科学の認識は？

自然科学 数学 論理学その他

間主観的共通認識(共通了解)の成立

(2) 信念対立の根本的理由 →その克服の可能性の原理は？

相互承認と共通ルール (ルールに不参加？)

(4) 「善・悪」、「正・不正」の「正しい」基準は？

社会的善悪、正義・不正義の基準は相互承認と合意形成
価値の原理論

★ 「本体論の解体」をいかに理解すべきか？

(1) 本体論的哲学の解体 → 存在論 形而上学 論理学

- * 世界の根本原理 究極原因は何か？
- * 世界それ自体を、正しく認識できるか？ 超越項の哲学

⇒ これら本体論的問いは終焉する

(2) 本体論の対抗としての「相対主義思想」の解体

現代分析哲学 ポストモダン思想の終焉

⇒ 哲学の方法と主題を立て直すという課題

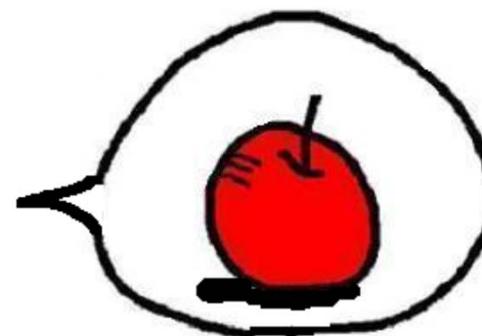
⇒ 社会批判の原理論

⇒ 人間思想としての哲学の再建

(2) 欲望相關性

欲望相関性と世界分節

1) 認識 = 反映図式

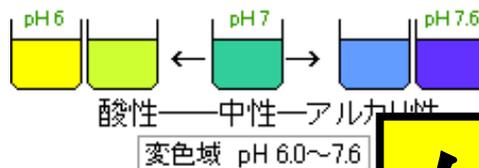


反映図式

2) 感覚 = 分節図式



リトマス試液



二(三)分割の世界

存在者



マダニ

- ① 光覚
- ② 嗅覚
- ③

欲望相関的分節構造

身体と欲望による世界分節

☆ 「現前意識」の現象学

* 欲望論的方法的基礎

* 現象学的本質洞察の前提

「世界認識の基本構図」「〈現前意識〉の水面」



☆ 身体の本質洞察

* ハイデガーの「実存」の本質観取

→「本質契機」を取り出す方法

1) 情状性(気分) 情動の生起

2) 了解 存在可能-目標の生起

3) 語り 情動と了解が、言語の規定を受けていること。

*「身体」の本質観取（本質洞察）

像表象(原表象 像表象 記憶表象)・意味直観・情動・思念・意志

現前意識

1) エロスの感受（快・不快の源泉）

情動生成 外的→知覚表象 内的→衝迫 欲求・欲望

2) 存在可能（ありうる）

企投的表象 →(目的表象)の生成 欲望の対象

3) 「能う」

企投能力 →身体有能力 ……できる

5分休憩

幻想的身体

幻想的身体

☆人間の身体、すなわちその「感受」「ありうる」「能う」の体制は、
文化的形成体である。関係的发生性をめづ

人間の身体は幻想的身体である

①

②

⇒ 一瞥知覚 → 美的 意味的感知

⇒ 感受性身体 感受化と身体化

⇒ 欲望の幻想性 真 善 美という対象

発生的現象学 → 「身体」は幻想的に形成される

《冬の
雨風
対し
がり出
でや
見う

*「幻想的身体」 →時熟する身体 (時間的形成性)

- ①「感受」 「エロス原理」 快-不快 →中心性の変容
- ②「ありうる」 欲望の対象 →欲望対象の変容 欲望の多数性
- ③「能う」 身体能力 →〈能う〉の変容

①生理身体性から幻想的身体性へ 「感受」

- * 身体的エロス 触発による「快-苦」 ⇒時間化…… 「エロスの予期-不安」の体制
 - * 関係感情のエロス
 - * 自我感情のエロス
- ⇒ 「関係的エロス」と「自己エロス」 →弁証法的相互作用

②欲望対象の変容 「ありうる」

- *「関係的エロス」→「自己エロス」
愛情独占 我有 所有 関係優位 承認価値 →自己価値 (自己欲望)
- *幻想的欲望 → 美 エロティシズム 理想 超越性

③「能う」の変容→「能う」

- *身体的修練
- *知覚の展開 「一瞥の現象学」 「見る」の変容 「構造的知覚」
- *語る 感情性の交換 関係了解性 →関係能力
- *思惟する 批判 思考の自由 世界の対象化

幻想的身体の根拠としての

「言語ゲーム」

母・子の始発的言語ゲーム

☆要求-応答ゲーム

禁止！
逆要求→応答



だめ！

リンゴ

★初期関係

①要求-応答関係 「泣く」

②関係感情的応答関係 →「笑い」「せがみ」 親和世界

③「禁止」の登場→ 逆要求-応答関係 →「よい-わるい」世界分節

⇒④「幻想的世界」の構造 （「よい-わるい」「快・不快」）

★発生的言語ゲーム

幻想的身体の「発生論」 「発生論的身体論」

◇母-子関係の発生的階梯

①一方的言語ゲーム

*要求-応答ゲーム 一方的 (子供主導)

「子」(ノイズ)→要求→応答→(充足)→(入眠) (→愉楽要求)

②「微笑み」「笑い」 エロス応答関係

* (あやす→あそぶ) ⇒関係感情と親和世界

③「禁止」の登場

* 「よい-わるい」分節の生成 対象→領域→行為

* 許可された世界 (安心) と 禁止された世界 (不安)

③ 相互的言語ゲーム

→内的ルール形成

* 相互的 要求-応答関係 (母親主導)

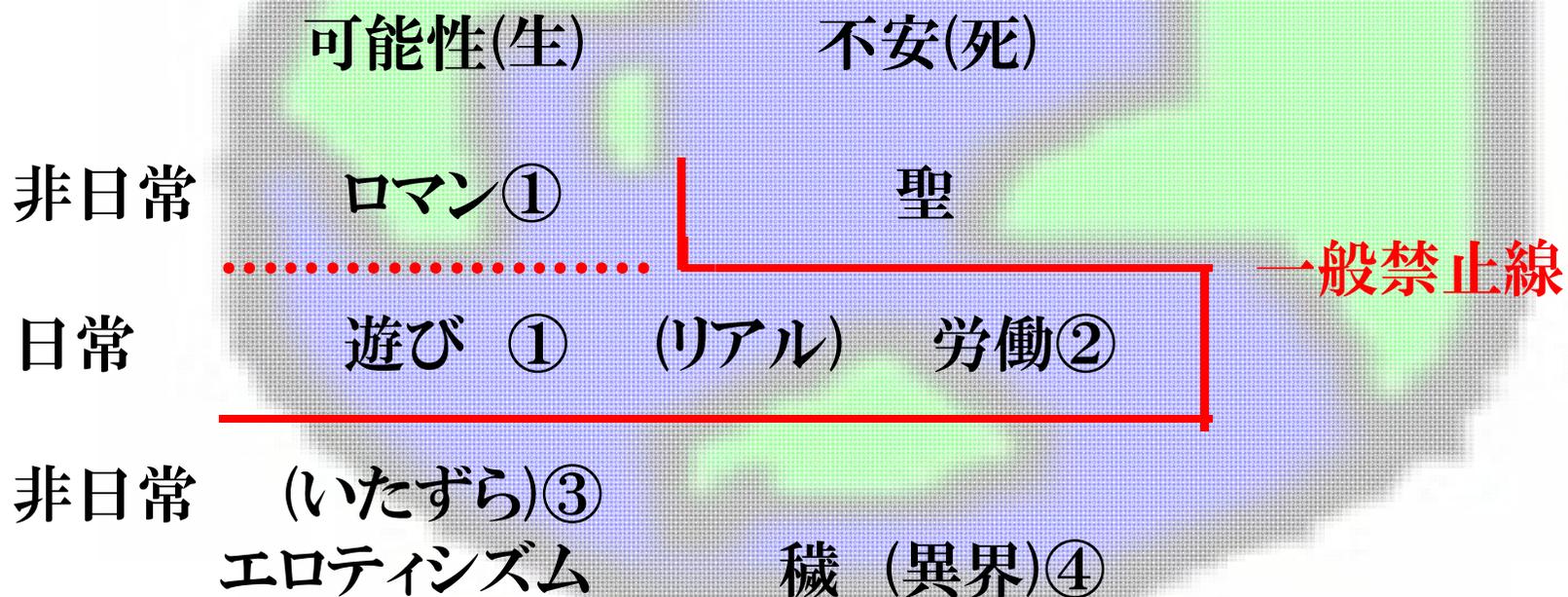
* よいこと-わるいこと分節 よい子-わるい子分節

* 言語的世界分節

→直示的教示(定義)ではなく、要求-応答的習得 カスパーの「レ」(ミルク) 28

☆ 「幻想的世界」の構図

- ①よい-快
- ②よい-不快
- ③わるい-快
- ④わるい-不快



☆ 価値審級論

★価値審級について

真・善・美 → 善悪 美醜 真偽

* 本体論的価値論

ヨーロッパでは、真善美の源泉 根拠は「神」⇒

* カントの転回 → 道徳法則 「道徳の人」

「君の意志の格律が、常に同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」

→ 善悪は関係的原理である。理性で判断できる。あとは自由意志の問題

* ヘーゲルの展開 → 普遍性をめがける「良心」の人

「道徳」は、近代啓蒙思想の最高の達成→しかし欠陥

①「道徳」は、善悪に全知のないことを認めない

②「道徳」は「自己欲望」に無自覚

③「道徳」は、理想理念に固執 近代では理想理念は複数性

④「道徳」は、信念対立を克服できない。 →「信念」の「断言」と「相互承認」

⇒その他 ハイデガー 「本来性」へ向かう「良心」 レヴィナス 「絶対的他者」

★価値審級について

真・善・美 → 善悪 美醜 真偽

* 本体論的価値論の解体

⇒ 真・善・美を、人間の内的ルール(幻想的身体性)とみなす。

① 善悪のルール

「よしあし」の区分 分節

② 美醜のルール

「感受性」のルール 素敵なもの、憧れの源泉

③ 真偽のルール

習俗的規範に対抗

関係の中で再形成された「ほんとう」と「偽り」

⇒ 「わが **内的規範は発生性をもつ** 文明」

☆善悪審級の発生論

- ① 「よい-わるい」規範の内面化
- ② 遵守と抵抗 →「よい子価値」は成立するか
- ③ 自己ロマン
- ④ 自我理想
- ⑤ 倫理の再形成 「ほんとう」

☆善悪審級の発生論

* 「よい-わるい」規範の形成可能性

*「よい子規範」の形成は、自己ロマン化 自己理想 自己配慮形成の基礎

- ① 「いたずら」 →親の規範のルール侵犯 個的ルール侵犯
→共同的(友だち関係) 新しいルール(よし悪し)
→ルールの本質を知る ルール形成へ

- ② 「反抗」 →親のルールへの自発的内属 「よい子」同一性の形成

受容関係 関係感情の親和性 信頼性

* 親の禁止、要請 命令をめぐる

関係感情の親和性・信頼感 対 自己感受性の中心性

⇒「よい子規範」の内面化 承認要求の形成

⇒ 自己ロマン化 自己理想の形成

⇒自己存在配慮へ 内的倫理性 「ほんとう」

☆ 価値審級論 (予告編)

* 言語ゲームの本質

* 「きれい-きたない」審級

* 美と芸術 美の普遍性について

☆次回の予告

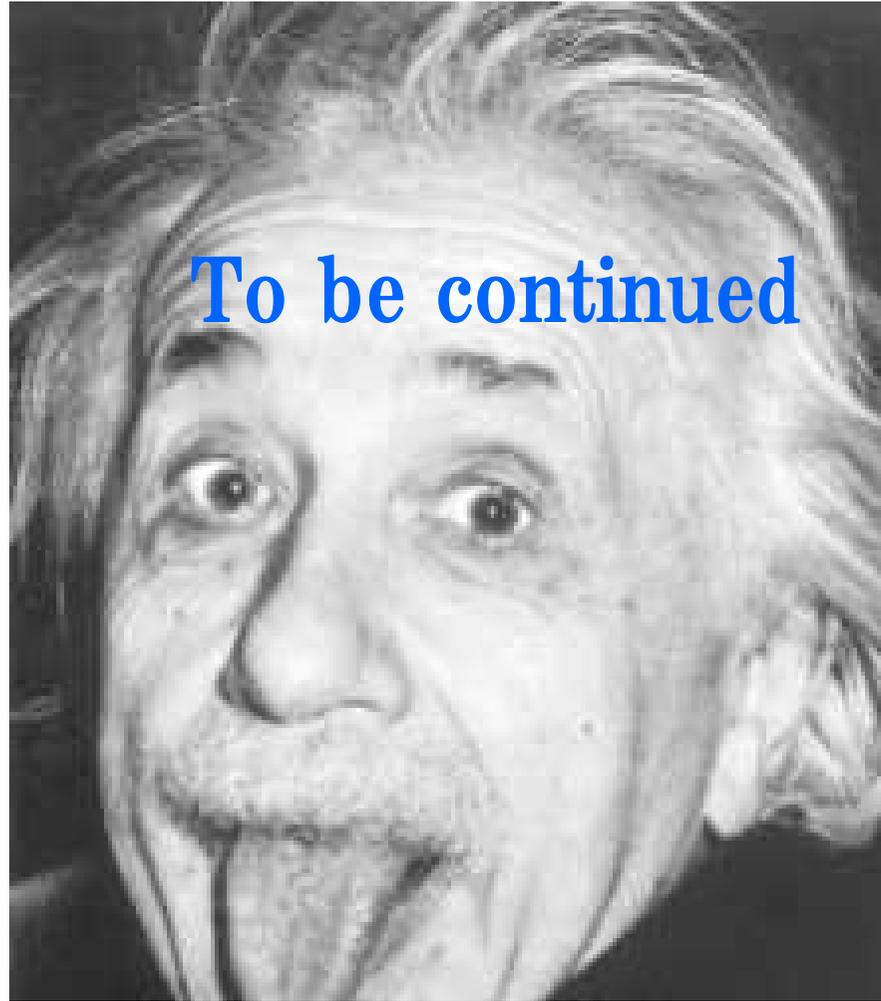
- ①人間だけが「言語ゲーム」をもつ
- ② 「言語ゲーム」は何を生み出しているか
その本質は何か
- ③ なぜ「言語ゲーム」が幻想的身体とその共同性を
形成するか
- ④ 言語ゲームと人間社会の可能性

☆「言語ゲーム」の本質論

- ① 人間だけが「言語ゲーム」をもつ
- ② 「言語ゲーム」は何を生み出しているか
その本質は何か
- ③ なぜ「言語ゲーム」が幻想的身体とその共同性を
形成するか
- ④ 言語ゲームと人間社会の可能性

☆美醜審級の発生論

- ① 「きれい-きたない」の審級の初期的発生
- ② 「きれい」と「きたない」の言語ゲーム
- ③ 「きれい-きたない」の本質洞察
- ④ 「子ども」はいつ「きれい-きたない」審級を了解する？
- ⑤ 「きれい-きたない」感受性形成の発生論
- ⑥ 美の秩序と、美的表現の普遍性



See you next time !

⑩2016年10月22日(土)NHK文化センター「現代哲学の最前線Ⅲ」

(1) 哲学の三つの根本的謎

①存在の謎(自然・宇宙・世界の存在原理) ②認識の謎(諸説の対立) ③言語の謎(言葉と真理)

ゴルギアステーズ

1)存在はありえない。

2)存在があっても、認識できない。

3)認識できても、言語で表現できない

→これらはいったん、普遍認識の可能性としてプラトン、アリストテレスに総括されるが、最終決着は見出されず。

→長いキリスト教哲学の時代を挿んで、近代哲学でもういちど新しい問題として再設定される。

→近代哲学の中心課題は認識問題。デカルト、ヒューム、スピノザ、カント、ヘーゲルなどが認識問題と格闘するが根本的解決は見出せず。

(2) ニーチェとフッサールによる本体論の解体

ニーチェ→「力相関図式」:新しい存在哲学→「客観世界」「本体」としての世界はまるきり存在しない。

「総じて『認識』という言葉が意味をもつかぎり、世界は認識されうるものである。しかし、世界は別様にも解釈されうるものであり、それはおのれの背後にいかなる意味をももってはおらず、かえって無数の意味をもっている。——『遠近法主義。』世界を解釈するもの、それは私たちの欲求である、私たちの衝動とこのものの賛否である。いずれの衝動も一種の支配欲であり、いずれもがその遠近法をもっており、このおのれの遠近法を規範としてその他すべての衝動に強制したがつているのである。」フリードリヒ・ニーチェ『権力への意志 下』、ニーチェ全集13、原佑訳、ちくま学芸文庫、1993年、27頁。

○あらゆる認識は遠近法である→あらゆる認識は絶対的なものではなく、必ずある観点(視点)を中心に持つ。その観点に応じて相関的に世界は解釈される。新しい価値哲学へ。

フッサール→「内在－超越図式」：現象学は確信成立の条件の学。

さまざまなレベルの世界像を間主観的な確信とみなす。

「世界は私にとって存在しかつ世界は内容的にもそれが私にとって存在する姿においてあるものなのだが、ただしそうであるというのも、ひとえにただ、世界は、私自身の純粋な生のうちから、意味および確証されうる妥当を、獲得してくるからこそであり、またその私自身の純粋な生のうちで開示されてゆく他人たちの生のうちから、意味および確証されうる妥当を、獲得してくるからこそである。」エトムント・フッサール「イデー I へのあとがき」(エトムント・フッサール『イデー I - I 純粋現象学と現象学的哲学のための諸(イ)構想(デー) 第1巻 純粋現象学への全般的序論』渡辺二郎訳、みすず書房、1979年)27頁。

○世界のさまざまな対象はそれ自体として存在しているのではなく、私の意識体験からその意味を獲得してくる。つまり、世界は意識の志向的相関者なのである。当然、世界の客観性(事物知覚や自然科学などの総体)も私の確信として存在するが、そこには他者もまた同じ世界を見ているのだという間主観的な契機が存在していると考えられねばならない。→客観性とは実は間主観性のことだった。→新たな本質論の可能性。すなわち、客観的な世界がまず存在して、その中に生きる私が世界を認識するのではなく、意識体験(生、実存)から間主観的にさまざまな世界像を織り上げているという徹底的な自覚。世界は人間的諸関係の意味と価値が反映されたネットワークであり、絶えず刷新可能なので、実際に刷新されつづけている。

→分析哲学(ローティ、クワイン)やポストモダン思想(デリダ、ドゥルーズ)によってその意義は十分に受けとられなかった。それどころか、現象学は現前の形而上学、独断的意識主義として批判を蒙る。

(3) 欲望＝身体相関性

基本テーゼ：人間はエロスの存在である。

→単に世界をそのまま写しとるのでも、また世界に感応するだけでもなく、欲望＝身体によって世界は分節されている。

身体の本質観取

①エロスの感受(快・不快の源泉)②存在可能(ありうる)③「能う」

★2016年7月30日(土)淑徳講義「現代哲学と欲望論 I」

(1)ここまでの講義内容

(2)今回の講義

1)再確認

①本体の解体

②現前意識の方法論「認識の謎」と、認識の普遍性の方法 反先構成

③身体の本質洞察 (感受 存在可能 能う) (⇒エロスの感受 欲望の対象性 企投可能性)

2)今回の主題

①人間的身体は、幻想的身体である。動物的身体との区別項

*「感受」エロスの身体性→エロスの中心性の変容 身体のエロス→関係エロス→自我エロス

*「存在可能」(欲望の対象)→愛情独占 所有 比較優位 初期承認(よい子)

*「能う」→修練的身体 語り 自由な思考

②始元的言語ゲーム (母-子の言語ゲーム) 「よい-わるい」

★母-子関係の階梯

1. 一方的言語ゲーム

2. 要求-応答ゲーム 一方的「子」(ノイズ)→要求→応答→(充足)→(入眠) (→愉楽要求)

3. 「微笑み」「笑い」エロス応答関係 (あやす→あそぶ) →関係感情の成立

4. 「禁止」「よい-わるい」世界分節

5. 相互的言語ゲーム 直示的教示(定義)ではなく要求-応答的習得

③「幻想的世界」の構造 (幻想的身体に対応) 「快-不快」と「よい-わるい」審級

④「現前意識」の現象学 再説→「現前意識」と「現実性」

★2016年7月30日(土)淑徳講義「現代哲学と欲望論 I」

⑤「幻想的身体」

1. エロスの身体性 (中心性)

身体エロス 関係感情のエロス 自己エロス

エロスの予期 不安 →不安の本質

2. 欲望の対象 愛情独占 所有 関係的優位 価値承認(自己価値欲望)→「自己欲望」へ

→美的対象 エロティシズム 超越性

3. 企投的力能 *修練的身体 *語る 関係的能う *自由な思考

⑥発生的言語ゲーム 幻想的身体の「発生論」 「発生論的身体論」

◇母-子関係の発生的階梯

①一方的言語ゲーム

*要求-応答ゲーム 一方的 (子供主導)

「子」(ノイズ)→要求→応答→(充足)→(入眠) (→愉楽要求)

②「微笑み」「笑い」 エロス応答関係

* (あやす→あそぶ) ⇒関係感情と親和世界

③「禁止」の登場

* 「よい-わるい」分節の生成 対象→領域→行為

* 許可された世界 (安心) と 禁止された世界 (不安)

③ 相互的言語ゲーム →内的ルール形成

* 相互的 要求-応答関係 (母親主導)

* よいこと-わるいこと分節 よい子-わるい子分節

⑦審級論 「よい-わるい」規範の形成 善悪へ

1. 従順 反抗 抗弁 いたずら

2. 悪

3. 自己ロマン化 自己理想

4. 自己存在配慮

